

# 「支那通」僧侶・藤井草宣と日中戦争

坂井田 夕起子

- 1, はじめに
- 2, 藤井草宣という僧侶
- 3, 中国視察の旅
- 4, 上海留学
- 5, 「満洲事変」の衝撃
- 6, 日中提携の呼びかけ
  - 1) 執筆活動
  - 2) 日中仏教の案内役として
  - 3) 日華仏教学会の設立
  - 4) 日中関係の悪化
- 7, 日中戦争の戦火の中で
- 8, おわりに

## 1, はじめに

かつて、真宗大谷派の僧侶に藤井草宣（本名：静宣）という僧侶がいた。1930年代から40年代にかけての日本仏教界で、いわゆる「支那通」として活躍した僧侶である。

13宗58派といわれた近代の日本仏教界で、「支那通」と呼ばれたのは管見の

限り水野梅暁<sup>1)</sup>と藤井草宣の2人だけである。中国語に堪能だったり、中国で活動した僧侶は他にもいるが、所属する宗派の枠内で布教活動に従事した僧侶たちは「支那通」と呼ばれていない。おそらく「支那通」の条件は、中国側と交渉できるだけの中国仏教界の事情に通じた知識を持ち、水野や藤井のように所属する宗派の枠を超えて活動することにあつたのではないか。

藤井草宣は1896年(明治29年)生まれ。京都の大谷大学を卒業後、宗教専門紙『中外日報』の東京特派員となるが、関東大震災を契機に退職。その後、中国への関心を深め、上海の東亜同文書院に留学した。「満州事変」の影響を受けて帰国した後も、中国人仏教徒との地道な交流を続け、大量の中国仏教関連の資料も収集した。藤井の略年表をまとめると【表1】のようになる。

藤井草宣は当時の中国批判高まる日本仏教界にあって、一貫して仏教による日中提携を訴えた。そして、日中戦争開始後も日本軍占領地と日本を往復し、中国仏教のために活動を続けた。藤井が住職を務めた豊橋の浄円寺には、戦争末期の大空襲を免れた多くの中国語資料が保管されており、2012年以降、上海東亜同文書院の後身である愛知大学を中心に目録作成が進められている<sup>2)</sup>。

藤井草宣についての先駆的な研究には、辻村志のぶの成果がある<sup>3)</sup>。しかし、浄円寺の調査が本格化する以前のもので資料的制約が多く、特に中国語資料

---

キーワード：日中戦争、中国開教(布教)、藤井草宣、日華仏教学会、太虚

- 1) 水野梅暁についての最近のまとまった成果は『鳥居観音所蔵 水野梅暁写真集』社会評論社、2016年。また藤谷浩悦「水野梅暁と仏教革新運動——青年期の思想形成を中心に」『東京女学館大学紀要』13号、2016年等。
- 2) 浄円寺が所蔵する中国語の仏教雑誌については拙稿「「支那通」僧侶・藤井草宣が収集した中国の仏教雑誌が意味するもの——日本の研究機関が所蔵する仏教雑誌との比較から」『中国研究月報』2016年11月号。
- 3) 辻村志のぶ「戦時下一布教師の肖像」『東京大学宗教学年報』19号、2001年3月。この他、辻村の修士論文(未定稿)に依拠した藤井草宣個人の研究としては、広中一成「第2回汎太平洋仏教青年大会における中国代表招致問題：藤井草宣研究の一環として」『愛知大学史研究』2009年第3号がある。

【表1】藤井草宣（1896-1971年）略年譜

年月	事項
1922年	大谷大学卒業、中外日報入社、東京特派員となる
1923年	関東大震災（藤井は被災せず）
1924年	中外日報退社、関東大震災1周年式典に参加
1925年	東亜仏教大会の事務方を務める
1927年	中国東北・華北・華中を視察（5-6月）
1928年	外務省の助成を受け、8月から上海東亜同文書院へ留学
1931年	年末、日本に帰国
1934年	鈴木大拙らの支那仏教史蹟研学旅行に同行（5-6月） 第二回汎太平洋仏教青年大会（日本開催）の中華班班長を務める
1935年	日華仏教研究会発会、常務理事に就任 中国人僧侶大醒の訪日（1ヶ月半）同行
1936年	華南、台湾視察
1937年	大谷派北京別院輪番を務める
1938年	北京覚生女子学校創設に関わる
1939年	中支南京東本願寺主任兼中支開教監督部出仕に就任
1940年	日華仏教連盟南京総会理事長を務める
1941年	中支宗教大同聯盟理事、大谷派上海別院輪番を務める
1943年	帰国。11月、陸軍刑法事件で特別高等警察に逮捕される

は全く分析されていない。そのため、トランスナショナルな藤井の活動を、日本仏教教団による「戦争協力」という旧来の一国史の枠組みに落とし込んでしまっている。また、辻村は藤井の思想を通常の僧侶や思想家と同様に分析したが、ジャーナリストでもあった藤井の記事を通読するとわかるのは、藤井の著述が彼の思想信条をあらわす以上に、その時々の日中関係の中で選択的に「ある事実を書く」ことによって「日中提携を呼びかける」目的を持っていたことである。したがって、藤井の中国に関する記事は、刻々と変化する日中関係の中で分析される必要がある。

近代日本仏教各宗派の中国布教（開教）史研究は、市川白弦や中濃教篤による戦争協力批判から始まった。近年では単純な戦争協力の事実だけでなく、中国で日本式仏教の天皇崇拝を強要しようとしたり、戦争の中で自宗派だけの勢力拡張を追求した事実も明らかにされるようになっている<sup>4)</sup>。本論は、そ

4) 小川原正道『近代日本の戦争と宗教』講談社、2010年。寺戸尚隆「日本の」

のような当時の日本仏教界にあって、なぜ藤井草宣だけが一貫して日中提携を訴え、中国人仏教徒（僧侶、居士含む）に協力し、中国仏教を支えようとしたのかをあきらかにしたい。

## 2、藤井草宣という僧侶

藤井草宣は若山牧水に師事して歌を詠む文学青年であり、柔道有段の武闘派でもあった。しかし、何より彼を特徴づけるのは「狂犬のよう」<sup>5)</sup>と形容された批判精神だった。過剰なまでの攻撃エネルギーの源は、宗教家としての自負である。藤井は大谷大学在学中、学内雑誌に寄せて次のように書いている。

「一体寺院は何の目的を以て建てられているか」

「僧侶は葬式の人足やお経の蓄音機ではない」

「私はお商売に法衣を着ていると自分ではどうしても思いたくなかった」

「私は、心は何処までも宗教によって救われてゆくのではあるが、生計を立つるには何か他の方法に依らねばいられないのです」<sup>6)</sup>

「乞食親鸞」の弟子としての生き方を渴望していた藤井草宣は、故郷三河の大谷派別院が伝道よりも資金集めに熱心なことに憤慨し、自坊もそれに貢献していることに複雑な心境を抱えていた<sup>7)</sup>。それが直接の原因かどうかは定かでないが、前住職だった父の死後も自坊には戻らず、東京特派員として中外日報社に就職し、多くの批判記事を寄稿した。

例えば、浄土真宗の開祖親鸞七百年記念についての記事では、本願寺が爵

---

、仏教界による「満州国」宣撫工作」『龍谷論壇』138号、2013年12月。新野和暢『皇道仏教と大陸布教 十五年戦争期の宗教と国家』社会評論社、2014年等。

5) 前掲「戦時下一布教師の肖像」94頁。

6) 「若き住職の祈願」『無尽灯』23巻2号、1918年。

7) 同前。

位を辞退して「国家本願寺」から「社会本願寺」への第一歩を踏みだせば、本願寺や大谷派が潰れても全国の寺と僧侶と信徒は残り、新たな仏教興隆につながる可能性があるとした<sup>8)</sup>。また、真宗本願寺派の21世法主大谷光尊の娘で貴族でもある九条武子の慈善活動の記事では、その日限りの質素な着物と下駄で貧民街に赴き、警察官に周囲を警護されている様子をこき下ろしている<sup>9)</sup>。

藤井草宣は、社会的に高い地位にある宗教家や著名な宗教家の虚飾や欺瞞を辛辣な言葉で批判したが<sup>10)</sup>、他方では自らの宗教者としての情熱の行き場を探しあぐねていた。大正時代の日本仏教界では、渡辺海旭<sup>11)</sup>に始まる浄土宗の労働者救済運動や、東西の本願寺派と対立した水平社の部落解放運動など、多くの社会運動が産声をあげていた。しかし、藤井は労働者救済運動への共感は見られないし、水平社の趣旨には賛同するものの、運動に対しては「感情が強すぎる」と批判的だった<sup>12)</sup>。大正時代の大きな社会変動の中で、藤井は率直な感情を吐露している。

私は明治の軍国日本の精神を多分に自分の身内にすみずみまで持っていることを自覚しています。まるで本能のように。——然し私はそれを余

---

8) 藤井草宣「雑苦罵乱(上)」『中外日報』1923年4月10日。

9) 藤井草宣「古臭い慈善あそびをした九条武子さんに注告する」『中外日報』1922年11月8日。

10) 例えば藤井草宣「私の心境(日野、西田、倉田、岡田諸氏に教えを乞う)」『中外日報』1922年1月27-31日。同「原告とその弟子、天香氏が裁判になるまで一燈園の破裂」『中外日報』1922年11月10、16、18日等。

11) 渡辺海旭(1872-1933年)：第一回浄土宗海外留学生として1900年にドイツのストラスブール大学に留学し、博士号を取得。帰国後は大正大学や東洋大学で教授を務め、また日本にドイツのセツルメント(隣保事業)のアルバイテハイム(労働者の家)をモデルとした浄土宗労働救済会の事業に尽力した(大谷栄一他編『近代仏教スタディーズ』法蔵館、2016年、93-94頁)。

12) 藤井草宣「雑苦罵乱」『中外日報』1923年4月19日。

り楽しい事には思っていません。私は兵卒は好きですが将校は大凡そ嫌いでありませ<sup>13)</sup>。

藤井草宣はジャーナリストであり、ある種徹底した現場主義者だった。そのため、藤井の過激な批判も仏教界を中心に藤井が直接見聞きする範囲に限定されていた。彼の宗教的情熱は、まだ見ぬ土地や抽象的な理想論に及ぶことはなかった。

1923年9月、関東大震災を経験した藤井草宣は翌年『中外日報』を退社。決意を新たに『教友新聞』を興したが、1年ほどで挫折した。同じ頃、同郷三河の出身で敬慕した佐々木月樵（仏教学者）が、大谷大学学長就任のわずか3年後に逝去した<sup>14)</sup>。未曾有の大地震、事業の失敗、尊敬する先達の死など、大正末期の混乱の中で藤井が情熱の行く先として見出したのは中国だった。

関東大震災の翌年、浅草本願寺で行われた震災一周年の式典では、中国人犠牲者約2千人を悼むために僧侶30余名が中国から招かれていた。彼らに同道し、通訳を務めたのが水野梅暁（1878-1949）である。水野は1901（明治34）年、上海に設立された東亜同文書院の一期生として海を渡った。卒業後は曹洞宗の開教師として湖南省で活動するも失敗。その後、大谷光瑞の既知を得て浄土真宗本願寺派に移り、日本や中国の政治家とも交友を持ちながら、日本仏教による中国布教の実現を目指していた。

慰霊式典に出席した渡辺海旭は「僕は英語も独逸語も多少はやって用を弁

---

13) 藤井草宣「万歳の叫ばれる色々な場合」(下)『中外日報』1923年10月30日。

14) 藤井草宣「佐々木月樵教授を思う」『仏教日本の自覚』甲子社書房、1927年、52-62頁。佐々木は学長就任後、閉鎖的な宗門大学から国民に開かれた仏教学の大学へと発展させることを目標に掲げ、ヨーロッパ視察の経験からカリキュラムに英語やドイツ語、フランス語を組み込み、さらにサンスクリット語、パリー語、チベット語も随意教える構想を取り込んだ（常光浩然「佐々木月樵」『明治の仏教者』下、春秋社、1969年。山田亮賢「続・佐々木月樵先生——近代教学を荷負した情熱の人」『仏教学セミナー』第19号、1974年5月）。

ずるが、最も近い隣国の研究を怠っていた」「支那語は水野君一人しかやっておらん」と藤井草宣に言ったという。藤井は後年、渡辺の言葉に強い刺激を受けたと語っている<sup>15)</sup>。

1925（大正14）年、日本で東亜仏教大会が開催された。この大会で藤井草宣は水野梅暁の秘書役を務め、道階（1866-1934）や太虚（1890-1947）、王一亭（1867-1938）といった中国の著名な仏教徒27名の中国代表団と知見を得ることができ、さらに太虚の日本視察にも同道した。そして2年後、『大正大藏経』を編纂する高楠順次郎教授の依頼を受け、藤井は初めて中国大陸の地に降り立ったのである。

### 3、中国視察の旅

大連の埠頭に船が着くと、そこにごろごろしている無数の支那人の苦力が直ぐ眼に入る。丸坊主の頭、弁髪（べんぱつ）の頭、イガ栗（いが栗）の頭、それらが膚もあらわな敗れた支那服を上下につけて、或いは立ち或いは寝そべっている。上陸して市街に出ると、夥しい車夫の群が皆この苦力であるのに気づく。通常の服装をしている日本人や支那人の女と彼らは全然別種の動物であるかに見える。「これでも人類の一員か？」私は先づ第一に嗟嘆（さたん）の声を放たざるを得なかった。「彼らの生活は？また彼らの彼らの安住するところの精神状態は何か」、私は忽ちそういう疑問に打つかった<sup>16)</sup>。

藤井草宣は1927（昭和2）年5月、中国大連の港に着いた。最初に彼の目に飛び込んできたのは、坊主頭でボロボロの短い服をまとい、靴も履かない「苦力」（肉体労働者）たちの姿だった。さらに藤井を驚かせたのは、苦力の存在を当然と見なし、人力車を引かせる人々であった。藤井は大連から旅順、鞍山、

---

15) 藤井草宣「回想の水野老師」松田江畔編『水野梅暁追懐録』（非売品）1974年、49頁。

16) 藤井草宣「満洲宗教雑記」『東方仏教』1927年9月。

撫順、奉天、長春、吉林、ハルピンなどいわゆる「満洲」地域をまわり、北京、青島、上海を旅した。そして、どの都市にも苦力が存在するばかりでなく、彼らが絶対的に多数である状況を知って愕然とした。藤井は、多くの苦力に人間らしい生活をさせるのが人類の義務だと考え、強力な政治権力の必要性和同時に宗教の役割にも思い巡らせた<sup>17)</sup>。

1873年（明治6年）、日清修好条規の発行を皮切りに、真宗大谷派の小栗栖香頂が中国へ渡り、以後多くの日本人仏教徒が中国を訪れ、多くの旅行記を書いた。彼らにとっての重要事項は日本仏教の源流として中国仏教であり、自らが属する宗派の開祖が学んだ中国の寺院や歴史的な仏教遺跡だった。

鎖国の中で理念的、観念的に形成された日本人の中国イメージは、日清・日露戦争に日本が勝利して以降大きく下落したが、仏教徒や漢学者は依然として「過去」や「歴史」のレンズを通して中国を観察した。現実には戦争、疫病、飢餓なども中国の重要な一部をなしているにもかかわらず、それらの現実的な姿は彼らのイマジネーションからは廃除されていた<sup>18)</sup>。

筆者は、1920年代後半から30年代半ばまでの『中外日報』や『文化時報』といった宗教新聞、そして『東方仏教』や『現代仏教』、『宗教公論』などの仏教雑誌に掲載されている数多の中国旅行記を読んだ。しかし、藤井草宣のように中国の圧倒的多数である貧困の中の人々を視界に捉え、自分と同じ人間として旅行記に綴った者はいなかった。もちろん、苦力の存在を旅行記に書き添えた僧侶が皆無だったわけではない。例えば、真宗興正派の総務という重職にあった青樹波水は、「満洲」の鉾山で働く苦力がわずかな賃金でも日本人のようにサボタージュしたり不平を言わないと旅行記に書き添えている<sup>19)</sup>。まるで、日本が「満洲」領有の暁にはよい奴隷になるといわんばかりの書き方である。

17) 同前。

18) エリック・シッケタンツ『墮落と復興の近代中国仏教 日本仏教との邂逅とその歴史像の構築』法蔵館、2016年、41-42頁。

19) 青樹波水「満鮮巡礼記（11）」『文化時報』1929年11月9日。

藤井草宣が日本人僧侶の例外たりえたのは、社会の底辺で苦しむ人々と共にあろうとした親鸞の弟子としての自覚と同時に、ジャーナリストとしての観察眼を持った現場主義者だったからである。中国視察前の藤井の中国論は平凡で、その他大勢の日本人と大差がない。しかし、いったん現実の中国を目にした藤井は、同時代の多くの仏教徒が囚われていた日本人特有の「レンズ」とは無縁となった。

藤井草宣が綴る北京訪問記は、僧侶や居士の仏教徒たちが戒律を守って慎ましく生活する様子や、戦火の中でも仏法を守ろうとする姿を生き生きと伝えている。藤井は北京の居士たちの施設「三時学会」に宿泊し、中国仏教徒としての実生活を体験した様子も記事にした<sup>20)</sup>。それは、藤井のジャーナリストとしての冒険心の発露であるが、同時に前年に日本仏教各派代表で組織された訪華団が、中国滞在中の料理やホテルなどの不満をあちこちで吹聴したことへの批判でもあった。

北京に続く藤井草宣の上海訪問記は、外国租界との境界に張り巡らされている物々しい鉄条網や銃を持って立つ外国人兵士の姿、そして成立したばかりの国民政府の青天白日満地紅旗がはためく様子を描いた。そして、日本の山東出兵によって高まった排日貨運動と日常の一コマも観察した。例えば「日本製品は売らない」と張り紙した百貨店の商品がみな日本製品ばかりだったり、「パリ」とロゴのついた商品には「メード・イン・イングランド」のラベルが貼ってある様子など、藤井のペンにかかると中国的処世術はコミカルでたくましいものとして表現された<sup>21)</sup>。

藤井草宣は上海訪問で東亜仏教大会以来の旧知を温めたことを報告する傍ら、内山書店を目にして衝撃を受けたことも記している<sup>22)</sup>。上海の内山書店と

---

20) 藤井草宣「法源寺、広濟寺訪問」『中外日報』1927年6月19、23日。同「北京に勃興せる三時学会を観る」『中外日報』1927年6月25-26、28日。

21) 藤井草宣「鉄鋼の上海に勇躍せる太虚法師の一派（一）」『中外日報』1927年7月10日。

22) 藤井草宣「鉄鋼の上海に勇躍せる太虚法師の一派（二）」『中外日報』1927年、

は、クリスチャンである内山完造夫妻の著名な日本書籍販売店である。内山は、京都教会の牧師である牧野虎次と出会って入信し、1914年、牧野の紹介で目葉の会社の上海出張員となった。結婚後、上海で妻が留守を守る間の内職としてキリスト教関係の本を売り始めたのが始まりで、当初は上海の日本人YMCAの信者を中心に商売をし、その後、文学分野にも扱いを広げて売上を伸ばした。さらに、日本留学から帰国した中国人青年たちが顧客の6割を占めるのに気づくと、自然科学や医学、農学、工学書などの専門書も揃えるようになった。まもなく、内山は会社を辞めて書店に専念し、店内に椅子とテーブルをおくようになり、書店は魯迅や郭沫若などの中国を代表する知識人が集まるサロンになった。そして、敗戦に至るまで内山夫妻が上海に来る日本文学者や研究者と中国側の交流の窓口となったことはあまりにも有名である<sup>23)</sup>。

藤井草宣の見た内山書店は、ちょうど内山が書店に専念し、店舗を拡張するころだったと思われる。藤井は、日本のメディアが書きたてる中国の「排日」と現実の中国社会の落差を知り、内山書店のように中国で受け入れられている日本人の姿も見た。そして藤井は、おそらく内山書店の有り様に自分の情熱の目標を見出したのである。

#### 4、上海留学

1928年8月、藤井草宣は外務省の支援によって上海の東亜同文書院に留学した<sup>24)</sup>。藤井の残したスクラップブックには、1928年から29年頃の中国の自然災害の深刻な記事と、それに対応しようとする仏教界の慈善事業の記事が目

---

7月12日。

23) 高綱博文「上海内山書店小史」『「国際都市」上海のなかの日本人』研文出版、2009年。

24) 大里浩秋「在華本邦補給生、第一種から第三種まで」『中国研究月報』第61巻第9号、2007年9月。

につく。

藤井草宣の留学中の活動で特筆すべきは資料収集である。藤井が集めた膨大な資料の中で、敗戦末期の空襲を逃れた中国語雑誌や新聞、冊子類をまとめたのが【表2】である。中国語雑誌と新聞が大部分を占めるが、日本語と中国語併記の仏教雑誌や冊子、仏教書店の目録も含めている。朝鮮半島やシンガポール、台湾で出版された雑誌も散見される。

現在、浄円寺に残る中国語の仏教雑誌・新聞類は120種類以上で、日本の研究機関が保管するものを大きく凌駕している。例えば、日本で民国時期(1912-1949)の仏教雑誌を最も多く保管するのは龍谷大学で12種類、続く東京大学でも10種類しかない。以下、駒沢大学は9種類、仏教大学が8種類、明治以来の伝統を誇る成田山仏教図書館でも6種類である。しかも、その中の多くが日中戦争時期に日本軍占領地で発行された雑誌であり、仏教研究の対象というよりも、宣撫工作に関する資料として収集された可能性が高い<sup>25)</sup>。一方、藤井草宣の収集した120余種の雑誌・新聞は9割が日中戦争以前に発行されたものである。藤井は個人でありながら、同時代の日本の研究機関の10倍以上もの中国仏教に関する資料を収集したのである。

21世紀以降、中国で民国時期の仏教が見直され、中国語雑誌や新聞などが大々的に復刻された。黄夏年教授が中心となって発行した中国書店の『民国仏教期刊文献集成』(全209冊)、『民国仏教期刊文献集成・補編』(全86巻)、『稀見民国仏教文献匯編(報紙)』(全12巻)、『民国仏教期刊文献集成 三編』(全35冊)シリーズによって300種類を超える雑誌や新聞の閲覧が可能になった。しかし、中国全土の研究機関を網羅した復刻にもかかわらず、このシリーズは欠号も多い。そして、藤井草宣が収集した雑誌や新聞の中には、上記のシリーズで復刻されていないものが多数ある。【表2】の資料のうち上記復刻シリーズの欠号を補えるのは25資料(◎)、また上記シリーズに収録されていない37資料(▲)も確認できた。しかも、【表2】は藤井が収集した書籍を含めておらず、

---

25) 前掲「「支那通」僧侶・藤井草宣が収集した中国の仏教雑誌が意味するもの」。

【表2】 浄円寺が所蔵する中華民国時期の仏教雑誌・新聞類（1945年以前）

題名	発行者	発行所	浄円寺所蔵
仏学叢報	狄楚青, 濮一乘	上海有正書局	1913-14年
弘心叢刊	弘心会 (広濟寺)	北京大学出版部	1922年
広長舌◎	苦行	上海仏教書局	1923, 30-31年
仏光	可端	揚州長生寺華嚴大学院	1923年
覺世報▲	可端		1928年4月
仏化新青年◎	寧達蘊	北京仏化新青年会	1923-24年
中華全国仏化新青年会代表団宣言書▲	道階	北京法源寺	1925年11月
東亜仏教徒が一地球上に於いて二十世紀の文化に資する任務に関する宣言▲		中華全国仏化新青年会東亜仏教大会出頭代表団	
二九五〇年仏誕紀念冊▲		北京法源寺	1925年10月
仏学院第一班同学録		武昌仏学院	1924年
海潮音	太虚	海潮音社 (上海, 泰県, 武昌等)	1924, 26-31, 33, 36-37年
中華仏徒旅行団出發特刊▲			1930年8月
仏化報▲		漢口古棲隠寺街仏教会	1925年
仏化季刊		震旦密教重興会 (潮安)	1925年
新僧◎		武昌仏学院同学会	1925年
支那内学院院録		支那内学院 (南京)	1925年
支那内学院成績品総目▲		支那内学院 (南京)	1925年
内学		支那内学院 (南京)	1925, 27, 28年
世界仏教居士林林務特刊▲		上海世界仏教居士林	1925年3月
世界仏教居士林勸募基金会特刊		上海世界仏教居士林	1925年5月
世界仏教居士林林刊		上海世界仏教居士林	1925-31年9月
世界仏教居士林林所開幕紀念刊		上海世界仏教居士林	1926年7月
世界仏教居士林成績報告書		上海世界仏教居士林	1933年1月
世界仏教居士林仏学図書館成立報告冊▲		上海世界仏教居士林	1933年11月
仏音◎		閩南仏化新青年会	1926年1-8月
三覚叢刊	竺居衆生	武昌仏学院	1926年3月, ?
大雲	駱季和	紹興大雲仏学社	1926年5月, 6月
東方文化	唐大門	東方文化集思社	1926, 30, 31年
心灯◎	太虚	上海仏化教育社	1926-27年
宏慈仏学院第一班畢業同学録◎		北京宏慈院	1926年
仏事報▲	嶺南仏教放生会	香港太平山六祖禪堂	1926年8月
楞嚴特刊		広州楞嚴学社	1926年8, 9月
南洋仏教聯絡会宣言及建設大綱▲	石叻春源	シンガポール直落亜逸街天福内本準備処	
太虚法師之仏学一斑▲		シンガポール講經会	1926年
増訂図書目録▲		上海功德林仏経流通処	1926, 29, 30年
仏化周刊 (非売品) ◎		江蘇泰県仏教居士林	1926-28年
法苑▲	玉慧観	上海・仏法僧園臨時法苑	1927年
仏慈大業廠股份有限公司創弁録起及章程▲	玉慧観		1930年?
浄業月刊	顧顕微	上海浄業出版社	1927-28年
聶氏家言選刊◎	聶其杰	中華書局	1927, 37年
現代僧伽	大醒, 芝峰	閩南仏学院	1928-31年
全国仏教徒代表須知		現代僧伽社	
現代仏教	大醒	閩南仏学院	1932, 33年
仏化青年 (非売品) ▲		厦門鎮閩南仏化青年会	1928年5, 9月
太虚法師赴欧米講学紀念特刊▲			1928年8月頃
中国仏学◎	南京毗盧寺	中国仏学会準備処	1928年9-12月

「支那通」僧侶・藤井草宣と日中戦争

題名	発行者	発行所	浄円寺所蔵
浙江全省仏教会旬刊◎		浙江全省仏教会	1928年9月
中華民国仏教機関調査録		仏教通訊社	1928、29年
化仏造像	銭化仏(銭蘇漢)	文華美術印刷公司(上海)	1929年3月
四川仏教団体電請政府改定寺廟管理条例特刊			1929年3月
慈航◎	登照	上海報本堂	1929年4、5月
紀念総理奉安特刊▲		中国仏教会	1929年6月
中国仏教会公報	仁山	中国仏教会	1929年7-9月
中国仏教会月報		中国仏教会	1929-30年
中国仏教会報	田瑛、太虚他	中国仏教会	1930-35年
改造中国仏教会之声	蘇川湘豫黔皖各省仏教連合会		1936年
中国仏教会会報(第一次徴求会員特刊)▲		中国仏教会	1935年11月
法海波瀾	仁山	鎮江金山大観音閣	1929-31年
上海仏学書局報告書▲		上海仏学書局	1929-34年
上海仏学書局股份有限公司報告書▲		上海仏学書局	1929-30、32-34年
仏学書局第二次股東大会記録▲		上海仏学書局	1931年1月
仏学書局図書目録▲		上海仏学書局	1930、33、35年
山西仏教月刊◎		山西仏教会	1929年7月
靈泉通信(贈呈本)	四川三台県中山公園三台仏学社		1930年
威音	顧浄縁、謝畏因	上海	1930-31年8月
弘法社刊	宝静	寧波弘法社	1930、35年
鐘声		上海仏学書局	1930年4月
安徽省仏教会第二屆全省代表大会記録▲			1930年12月
仏教評論	台源	北平柏林寺仏教評論社	1931年
宝慈月刊▲	邱蓮午編集ほか	成都護国庵内	1931年3月
江南九華仏学院之刊(非売品)	蕙庭	九華仏学院之刊(安徽)	1931年
四川仏教月刊		四川仏教月刊社(文殊院)	1931、34年
仏学半月刊	範古農ら	上海仏学書局	1931-42年
香海仏化刊	宝静	香港仏学会	1932-33年9月
正信半月刊、正信周刊	法舫、芝峰ほか	漢口仏教正信会宣化団	1932-37年8月
世界仏学苑設備処報告書◎		世界仏学苑北平通信処	1932年6月
世界仏学苑漢藏教理院開学紀念特刊(非売品)▲	漢藏教理院	上海仏学書局	1932年12月
人海灯(復刊)	寄塵	潮州嶺東仏学院	1933-37年
慈航画報	劉仁航(靈華)	上海慈航画社	1933-34年
頻伽音◎		広州仏学会	1934、37年
仏学書目◎	北平東城大仏寺	庚申仏経流通処	1934年
時輪金剛法会特刊(非売品)▲	杭州菩提寺路本会事務所宏揚処		1934年4月
仏教特刊(市民報:二面)▲	黄慧泉、鄭奠坤	世界仏教居士林:編集部	1934年1、8-12月
中日密教研究会章程▲			?
中日密教◎		中日密教研究会(天津)	1935-36年
仏教日報◎	範古農	上海仏教日報社	1935年、37年
浄土宗月刊◎		武昌浄土宗月刊社	1935年6、10月
南詢集	嶺東仏学院	広東潮州開元寺	1935年6月
北平仏化月刊	南口居士林・張家口居士林・北平仏化居士会		1935年6月
仏教▲	劉顕亮	広済寺仏教臨時救済会	1937年8月
湖南仏教居士林林刊◎	韓龍雲	震旦密教復興会	1935年6-7月
北平仏教会月刊◎		湖南仏教居士林	1935年8月
微妙声	周叔迦	東城大仏寺仏経流通処	1935、36年
仏教与仏学(非売品)	湯用彤、周叔迦ら	上海仏学書局	1937年1-6月
仏学▲	寂英、丹戎巴葛普陀寺(シンガポール)		1935-36年
敬仏◎	仏学会厦門市分会		1935年12月
敬仏◎	神田恵雲	厦門敬仏会	1935-36年

題名	発行者	発行所	浄円寺所蔵
人間覚	辛清波	中国仏学会廈門分会	1936-37年
仏教新聞▲		上海	1937年5月20日
日華仏教		日華仏教会（東京）	1936年2月
仏教月報◎	大醒主筆	天津仏教月報社	1936-37年
仏教公論	慧雲（林子青）	廈門南普陀寺仏教養正院	1936-37年
現実▲	閩南学僧自治会	廈門閩南仏学院	1936年6-10月
覚社年刊	季聖一、葉聖方	蘇州覚社	1937年
仏教女衆専刊	海静	武昌菩提精舎	1937年5月
喜報◎	北平中央刻経院	仏経善書局	1937年10月
東方文化月刊▲		東方文化出版社	1938年1月
晨鐘	杭州日華仏教会	杭州新報社印刷部	1939年12月
大乘◎	廈門大乘仏教会	南普陀仏化学校	1940、42年
覚有情	陳法香、蘇慧純	上海大法輪書局	1940年12月
同願学报		仏教同願会（北京）	1940年12月
羅漢菜		羅漢菜雜誌社	1941-42年
弘化月刊	徳森、鐘慧成	上海印光大師永久紀念会	1941-42年
覚音	竺摩主編	香港青山覚音社	1941年10月
閩院詩刊▲		閩南仏学院外語	1942年2、4月
閩院詩鐘▲		閩南仏学院	1942年1月
仏教復興▲	小笠原彰真	仏教文化研究部（上海）	1942年11月
中流◎		焦山仏学院同学会	1942年
妙法輪	震華	玉仏寺上海仏学院	1943年1、5月
仏教文芸	南京毗盧寺仏教文芸月刊社		1944年2、7月

◎は『集成』シリーズの欠号を補える資料。▲は『集成』シリーズで復刻されていない資料。

仏教以外の雑誌も除外している。藤井が収集した資料群は、日本随一なばかりでなく、現代中国においても既に失われてしまったか、もしくは未確認の貴重な一次資料である<sup>26)</sup>。

【表2】にまとめた資料類は大きく分けて3つの特徴を持つ。まず第1に、中国各地から広範に雑誌を収集していることである。日本の各大学が所蔵する仏教雑誌は、北京や南京、上海、武漢などの数都市に限定されているのに対して、藤井が収集した雑誌は当時出版事業の中心地だった上海を筆頭に、北京や天津、南京とその周辺、湖北の武漢三鎮、さらには湖南、四川、福建、広東、香港からシンガポールまで広範にわたっている。第2の特徴は、上海の居士たちが発行した雑誌が多く、第3の特徴は中国仏教の改革派とされる太虚の法脈に連なる出版物が多いことである<sup>27)</sup>。

26) 同前。

27) 同前。

当時の日本人仏教徒の中国への関心は、自分の研究する経典や過去の高僧、もしくは自身が所属する教団に関わる寺院・史蹟が中心であり、同時代の中国仏教は「衰退」して評価に値しないと見なされていた<sup>28)</sup>。しかし、藤井草宣は同時代の中国仏教について資料を収集し、理解しようとしたのである。

例えば、1929年、改革派として知られる太虚が主導し、近代中国で初めての仏教統括組織である中国仏教会が成立した。【表2】には中国仏教会や各省分会の機関紙や出版物が多数含まれている。これらの資料は、日本の研究機関のどこにも保管されていない。

上海留学以前、藤井草宣は高楠順次郎（東京帝国大学教授）主催の『現代仏教』編輯に関わり、日本の仏教書籍の新刊紹介や論文紹介欄を担当したり、日本仏教界で発行されている300種以上の雑誌と発行団体のリストを作成した経験がある<sup>29)</sup>。藤井の資料収集は、この時の学術的経験を元にしたものであろう。藤井が明確な目的を持って各地の出版物を収集した形跡は、【表2】に散見される仏教専門書店の目録からもうかがうことができる。

藤井草宣が集めた仏教資料には居士による出版物が多いが、それは民国仏教において居士たちが重要な役割を果たしていたことによる。民国時期に盛んになった「居士仏教」は在家で妻帯以外の戒律を守る仏教徒のことで、開港都市で成功したビジネスマンや社会的エリート、元軍人や元政治家などに多く、彼らの社会活動も民国時期の特徴となっていた<sup>30)</sup>。【表2】には世界仏教居士林や浄業社といった上海の居士団体の機関紙も多い。

明治以降、公に肉食妻帯を認められた日本の僧侶と、厳格に戒律を守る中国の僧侶の差は大きく広がった。特に、藤井草宣が属する浄土真宗は開祖親

---

28) 前掲『墮落と復興の近代中国仏教』28-56頁。

29) 藤井草宣・近藤信夫「日本仏教関係雑誌総目録」『現代仏教』第4巻第47号、1928年3月。「対支運動に投ぜんとする藤井草宣君のこと」『仏教思想』第3巻第9号、1928年。

30) 唐忠毛『中国仏教近代転型的社会維：民国上海居士仏教組織与慈善研究』広西師範大学出版社、2013年等。

鸞自ら肉食妻帯の「在家仏教」を実践したことで知られており、日本の中でも世俗的な色彩が濃い。結婚し、剃髪していない藤井は、中国ではしばしば「居士」と見なされていたようで、浄円寺に残る手紙には「藤井居士」と宛名書きされているものも残されている。

日本の世俗化した僧侶のあり方については現代でもしばしば議論になるが、特に戦前の「日本仏教がアジアで最も優れたもの」だと自負する風潮の中で<sup>31)</sup>、居士と呼ばれることは日本人僧侶の尊厳に関わる問題だった。しかし、藤井は居士の呼称を意に介さなかったようである。

1929年、上海の居士たちは王一亭を中心に仏教専門書店「仏学書局」を設立した。上海仏教書局は、営利を目的とした初めての仏教経典印刷会社で、株式会社を設立して投資を求めたほか、株式総会を開いて理事や監事を選出した。同時に、各地に分局や販売所のほか、贈書会（入会者に若干の経典を贈る）も設立しつつ、伝統方式で募金を集め、経典を印刷する印書功德基金も併設した。独自の販売ルートに加えて一般書店の流通ルートとも提携したので、1937年には仏教経典や書籍の取扱量が6千点以上になったという。さらに、会員制度によって仏学文会を組織したほか、仏教のラジオ講演や仏教レコードの販売も行った<sup>32)</sup>。【表2】には仏学書局の目録のほか、報告書や株主総会の記録もあることから考えると、藤井草宣が仏学書局の会員に準ずる存在だった可能性もある。

藤井草宣と中国人僧侶との交友関係は、太虚とその法脈が中心だった。それは藤井の師にあたる水野梅暁が太虚の改革運動を高く評価していたことに起因するが、より現実的な問題として、当時70万人以上といわれた中国人僧尼の多くは日本の仏教を中国仏教の末流と見なしており、戒律を守らない日本仏教が中国に悪影響を及ぼすことを恐れていた<sup>33)</sup>。日本人仏教徒と交流し、

31) 藤井健志「仏教者の海外進出」（末木文美士他編『近代国家と仏教』新アジア仏教史14、日本Ⅳ）佼成出版社、2011年。

32) 阮仁澤・高振農『上海宗教史』上海人民出版社、292-303頁。

33) 東初著（河村孝照編・椿正美訳）『中国仏教近代史』日本伝統文化研究所、

日本仏教の近代化を学ぼうとする者は太虚とその弟子たちや、日本留学経験のある若い居士に限られていたのである。

太虚が発行する『海潮音』は、1920年に発行されて以来、中国の戦乱の中で上海、北京、泰県、武昌、漢口、南京など出版地を変えつつ、太虚の弟子たちによって編集が継続された。藤井草宣は『海潮音』を留学時代から購読しているほか、【表2】には太虚とその弟子である大醒（1900-1952）や法舫（1904-1951）、芝峰、寄塵、通一らが発行した雑誌が見える。太虚が設立した武昌仏学院、閩南仏学院、嶺東仏学院などの出版物も多い。浄円寺に残るこれらの雑誌には表紙に編者の署名があり、宛名書きがない場合も「寄贈」や「贈閱」「請交換」といった印鑑が押されるなど、帰国後も藤井と彼らが交流していたことをうかがわせる。1930年代半ば、『海潮音』を編輯していた大醒の日記には、藤井から日本の仏教資料が届いたとの記載も見られる<sup>34)</sup>。

藤井草宣は上海留学直前、それまでの新聞や雑誌に寄稿した文章を本にまとめて出版し<sup>35)</sup>、留学中は日本のメディアにほとんど寄稿していない。おそらく、中国語習得に専念したためと思われるが、32才という年齢で単身留学した苦勞を書きたくない藤井なりの矜持もあったと思われる<sup>36)</sup>。留学途中では病気による長期入院も経験している。

ようやく藤井草宣が留学生生活を寄稿しだすのは、4年目の1931年半ばである。同年春、藤井は世界仏教居士林の一室を借りて中国人仏教徒との生活を開始した。若い中国人仏教徒が藤井の部屋にやって来て議論する毎日は内山書店のサロンのようであり、留学前の藤井が思い描いた理想の留学生活であ

---

↘1999年、106頁等。

34) 大醒「空過日記」『大醒法師遺著』海潮音社、1963年、978頁等。

35) 前掲『仏教日本の自覚』。

36) ただし、藤井にとって歌だけは別で、上海の日本語新聞『上海日報』に投稿をしている。藤井は生涯歌を詠み、『燃ゆる愛欲』（1920年）、『群生』（1954年）、『黒袈裟』（1964年）の歌集を出版した。

る<sup>37)</sup>。行間から藤井の満足そうな顔が浮かぶ文章を、一部抜粋する。

近頃は迂生の周囲には支那の青年僧青年居士の仏教研究家四五名有之、毎日毎日会談致居ますが、仏教を研究する人々は悉く日本を愛し日本を慕い迂生所有の日本出版の仏教関係の書物の如きは羽無きに飛び去ること多く、迂生は惜しき心地の中に莞爾たるもの有之、彼らの持ち去るに委せて、時々は之が翻訳を勧め居ります。(中略)

斯様な訳で今や支那は日本より刺激せられて(始めのうちは幾分の反感もあり自尊心もあったでしょうが)遂に日本仏教の本当の実力を認めるに及んでは、非常な勢で日本研究に取りかかり、今後四五年中には如何程の発展を此の方面より齎し来るか分らぬ程に思えます<sup>38)</sup>。

同年7月、藤井草宣は3年ぶりに『中外日報』へ寄稿し、中国語に翻訳して出版されている日本の仏教書や中国の仏教雑誌に掲載された論文の数々を紹介し、日本の仏教研究の多くの成果が中国で着実に受け入れられている様子や中国仏教界の出版事情を伝えた。同時に、自らの留學生活が中国側に受け入れられて順調な様子もさりげなく報告している<sup>39)</sup>。

さらに9月、藤井草宣は日本で『支那最近之宗教迫害事情』という本を自費出版した。この「宗教迫害」とは、1927年に南京国民政府が成立して以降に展開された「廟産興学」のことで、寺院が所有する土地や財産を教育に転用しようとする運動である。限られた予算の中で教育振興を行いたい地方政府の思惑とは別に、一部では「迷信打破運動」の要素なども加わり、各地の寺院や廟宇は物理的にも経済的にも大打撃を受けた<sup>40)</sup>。多くの資料にもとづ

---

37) 藤井草宣「上海通信(春)」『朋人』第40号、1931年7月。

38) 藤井草宣「上海だより」『現代仏教』8巻84号、1931年8月。

39) 藤井草宣「支那語訳された日本仏教家の著述」『中外日報』1931年7月22-24日。

40) 大平浩史「南京国民政府成立期における仏教界と廟産興学運動——新旧両派による「真の仏教徒」論を中心として」『仏教史学研究』第54巻第1号、2011年。

き、中国仏教界が置かれている困難な状況とそれに抵抗する仏教徒を紹介した本書は、上海仏学書局に集う仏教徒に支えられた藤井を象徴している様に見える。

## 5、「満洲事変」の衝撃

しかしながら、藤井草宣の夢だった留学生活は突然終わりを迎えてしまった。関東軍が引き起こした「満洲事変」によって、中国各地で排日運動が高まったためである。中国人居住区での生活に危険を感じた藤井は、9月末に日本人居留民の多い地区にある真宗大谷派の上海別院に移った。しかし、ここでも排日ピラをめぐる騒動が発砲事件に発展し、数名の死傷者を出した<sup>41)</sup>。上海滞在の道を模索した藤井だが、同年末、留学を断念して帰国した。藤井の帰国の翌月、「上海事変」が勃発し、上海は戦場となってしまった。

藤井草宣の文章は彼の人となりをよく反映しており、通常、生き生きした口語調でリズムよく記事を綴る。一方、書きたくないことは書かず（留学や入院の苦勞など）、どうしても書かなければならない不本意な報告は、漢文調の硬い記事を書く。帰国直後の藤井が『中外日報』に寄せた記事は漢文調で、中国現地で見聞きした事柄を語りつつ、日本の軍事作戦を一応は容認してみせた。しかし、結論では日本に軍事作戦後の状況を維持するだけの「実力」があるのかと問いかけることも忘れていない<sup>42)</sup>。その後一年近く、藤井は中国や時事問題に関わる寄稿をしなかった。おそらく、藤井自身の中で日中の武力衝突とそれに関わる経験について整理できなかったのではないか。

ようやく藤井草宣が心情を吐露できるようになったのは、1932年11月である。藤井は『中外日報』に投稿し、日本仏教界の一部に「満洲事変」や「上海事変」の責任を中国仏教界に問う声があることを反論した。記事の中で、

---

41) 藤井草宣「上海別院物語」『真宗』1932年4月。

42) 藤井草宣「騙術・武術・実力 日支問題について 上海より帰港の日」『中外日報』1932年1月30-31日、2月1日。

藤井は中国仏教界の困難な状況を説明し、日本と中国の仏教事情は全く異なるにもかかわらず、日本仏教界はそれを知ろうともしないことを批判した。さらに「上海事変」の発端となった僧侶襲撃事件についても、日蓮宗の独善的な活動が原因だと指摘した<sup>43)</sup>。

また、日本仏教界を代表する立場にある大谷光瑞（真宗本願寺派）が『支那事変と我國民の覚悟』の著作で日本の權益を主張し、中国を「膺懲」するよう訴えるのは政治家のすることであり、仏教徒らしい慈悲や情愛がないとも批判した<sup>44)</sup>。

藤井草宣は、記事の中で「自分は今でも支那を愛し、支那人を親しみ、支那の仏教徒を慕う心で一杯」だと心情を吐露した。そして、中国の僧侶は日本と異なり、昔ながらの厳格なる戒律を守って酒肉五辛を断ち、女性も遠ざけており、俗世から離れるため学術レベルや社会知識は低い、僧侶らの心情が清いことは、肉食妻帯で欲の亡者となった日本の僧侶とは比べられないと力説した。藤井は記事の末尾で日本仏教界の「識者」に対し、中国に関心を持つとするならば中国仏教徒に「警告」するのではなく、藤井の著書などを読んで中国仏教の諸問題を知り、日中提携に努力するのがあるべき姿だと主張したのである<sup>45)</sup>。

藤井草宣のこの記事に対して、どんな反応があったのかはわからない。しかし、その後半年ほど『中外日報』に藤井の中国関連記事が載らなかったことや、『現代仏教』へ寄せた文章に「四年にわたる中国留学から、突然故国へ亡命して」<sup>46)</sup>など自嘲的なことを書いている状況から勘案すると、反応はよくなかったのではないと思われる。

---

43) 「此際日支仏教徒提携し和平運動を誘発せよ」(上)『中外日報』1932年11月15日。

44) 大谷光瑞『支那事変ト我國民之覚悟』大乘社東京支部、1931年10月。藤井草宣「此際日支仏教徒提携し和平運動を誘発せよ」(中)『中外日報』1932年11月16日。

45) 藤井草宣「此際日支仏教徒提携し和平運動を誘発せよ」(中・下)『中外日報』1932年11月16-17日。

46) 「舍利はふえる」『現代仏教』10巻103号、1933年4月。

## 6. 日中提携の呼びかけ

### 1) 執筆活動

それでも藤井草宣は、日本の仏教徒に中国仏教の実情を伝える努力を諦めなかった。半年後、藤井は中国人僧侶の伝統的な修行や戒律を守った質素な生活を綴るエッセイを『中外日報』に投稿し、自分は現在『清代高僧伝』を執筆中だと書いた<sup>47)</sup>。

当時の日本仏教界では、中国仏教は隋唐の時代に最盛期を迎え、その後次第に衰退し、宋代以後は見るべきものがないと考えられていた<sup>48)</sup>。藤井草宣は、近世中国仏教の評価が低い原因は清代の中国仏教の状況が正しく日本に伝えられていないからだと考え、『清代高僧伝』を執筆することで誤った認識に一石を投げようとしたのである。

1933年半ば、執筆活動に専念していた藤井草宣の元に、上海で旧知だった玉観彬と向出哲堂の訃報が届いた。玉観彬は朝鮮人の母と中国雲南人の父を持ち、若い時には朝鮮独立運動に関わった人物で、太虚と知り合って居士となり、太虚の活動を経済面から支えた<sup>49)</sup>。一方、向出哲堂は会津の出身で、日露戦争に出征した後も朝鮮半島にとどまって放蕩生活を送った挙句、妻に去られて妙心寺派で出家した。釜山で活躍したものの同派から追い出され、黄檗宗に代わって上海に流れ着き、最後は奉天で亡くなった<sup>50)</sup>。二人共、近代的な国民国家の枠におさまれず、異郷で仏教に救われた人々だった。

2人の半生を『中外日報』で温かく紹介して弔った藤井草宣は、「満洲事変」二周年を契機に同紙上で再び日中提携を呼びかけた。藤井によれば、現在の

---

47) 「近世支那僧の行持生活」『中外日報』1933年6月24, 29, 30日, 7月1日。同時期、藤井は高楠順次郎と共に『支那仏教人名辞典』の編纂にとり組んでいる。

48) 前掲『墮落と復興の近代中国仏教』189-199頁。

49) 藤井草宣「上海で暗殺された玉観彬居士を想う」『中外日報』1933年8月8-9日。

50) 藤井草宣「奉天で急逝した奇僧向出哲堂物語」『中外日報』1933年8月24-25日。

日本と中国は小康状態に見えるが、実際は改善しておらず、中国政府は欧米との関係を強化しつつある。中国は個人の結びつきによる信用社会であり、厳しい日中関係の中では個人的な力が必要である。だから、かつて中国に渡った浪人や軍属のような日本人ではなく、文芸や思想、宗教方面の教養ある日本人青年が中国側と信頼を結び、厳しい局面を打開する必要があると力説し、最後に厦門の閩南仏学院で日本語教師を務める神田恵雲（真宗大谷派）の活動を紹介した<sup>51)</sup>。

この呼びかけに賛同する意見が『中外日報』寄せられたことで、藤井は大いに励まされた<sup>52)</sup>。以後、精力的な執筆活動によって、あるときは中国仏教事情を、またあるときは国境を越えて活躍する青年仏教徒を紹介し、多方面から日中の仏教提携を呼びかけたのである（【表3】）。

藤井草宣は個人を基礎にした日中提携だけでなく、日本の仏教諸派に対しても中国での活動を訴えた。当時の日本は欧米諸国と異なり、中国での布教権を持っていなかった。そのため、中国に進出した仏教諸派の活動は日本人居留民相手に留まっていた。中国人信者の獲得が見込めない中で、日中提携の活動に二の足を踏む日本仏教諸派に対し、藤井は教団の利益よりも中国民衆の精神を救うことを優先し、僧侶学校を設立すべきと訴えた。そして、日本の教団が「満洲」に僧侶学校を作れば、伝統的な徒弟制度しかない中国の僧侶教育のレベルがあがり、中国全土に住む人々の魂を救うことができると主張した<sup>53)</sup>。日本の仏教教団による利益追求を否定し、日中の協力関係にもとづく仏教の発展によって中国の民衆を救うことは、始めて中国の地を踏んで以来、藤井の一貫した目標でありつづけたのである。

---

51) 藤井草宣「来るべき亜細亜の危機に備うる日支青年の個人的提携を提唱す」『中外日報』1933年9月28日。

52) 村上素道「藤井草宣氏に呈す」『中外日報』1933年10月8日。

53) 藤井草宣「支那、満洲の僧侶のため奉天に仏教中学を設けよ」『中外日報』1933年10月21日。

「支那通」僧侶・藤井草宣と日中戦争

【表3】藤井草宣の著作リスト（中国関係：1931-36年）

発行年月日	題名	掲載誌・出版社
1931. 7.22-24	支那訳された日本仏教徒の著述	中外日報
1931. 9	『最近支那宗教迫害事情』	自費出版
1932. 1.30- 2. 2	騙術・武術・実力 日支問題について 上海より帰港の日	中外日報
1932.11.15-17	此際日支仏教徒提携し和平運動を誘発せよ	中外日報
1933. 6.24- 7. 1	近世支那僧の行持生活	中外日報
1933. 9.28	来るべき亜細亜の危機に備ふる日支青年の個人的提携を提唱す	中外日報
1933.10.21	支那 満州僧侶のため奉天に仏教中学を設けよ	中外日報
1933.10	支那宗教研究所開設の夢想	現代仏教
1933.10	『最近日支仏教の交渉』	東方書院
1933.11	現代支那の仏教見聞記	禪の生活
1934. 4	支那現代の仏教	国民仏教聖典
1934. 5. 6- 8	支那仏教徒招待に就いて	中外日報
1934. 6. 5- 8	天童山再登記	中外日報
1934. 6. 9, 13	天童より阿育王へ来り 圓瑛法師に会す	中外日報
1934. 6.12	南京より	中外日報
1934. 6.14	汪兆銘院長と会見す	中外日報
1934. 6.16	太虚法師を問う	中外日報
1934. 6.26	再び上海に戻りて	中外日報
1935. 7	『日華の仏教的提携』	日華仏教学会
1935. 8. 1- 2	昭和十年訪華団批判 禿氏・林・大西諸羅漢に呈す	中外日報
1935. 9	改興途上の支那仏教	真宗
1935. 9	現下の支那仏教情勢	禪の生活
1935.10	天童・普陀の奇景	禪の生活
1935.10	支那民族の仏教的風俗	禪の生活
1935.10	清廷と仏教殊に臨濟宗	大谷学報
1935.10. 5- 6	支那仏教会の危機来る 大醒法師決起す	中外日報
1935.10-11	僧伝より見たる清代仏教	現代仏教
1935.11. 6- 9	鈴木大拙博士の『支那仏教印象記』	中外日報
1935.11	支那の仏教風俗	禪の生活
1935.11.26-28	転換期に臨める台湾仏教の現状	中外日報
1935.12.17-19	日華仏教の一奇譚	中外日報
1935.12	清朝と仏教	南瀛仏教
1936. 1	福州に友を弔う	中外日報
1936. 1.14	四段階を経たる日華仏教交渉史断片	日華仏教
1936. 1.16-18	黄檗行前記	中外日報
1936. 2	北京護法論（小栗栖香頂著） 藤井草宣抄	人海灯
1936. 3	人物評伝／印光	日華仏教
1936. 3	現代支那の禅刹	南瀛仏教
1936. 4	南普陀と南仏学院	日華仏教
1936. 4	支那の仏教風俗	南瀛仏教
1936. 5	大醒法師之「日本仏教視察記」	日華仏教
1936. 5	支那の怡山と鼓山に詣づる記	禪の生活
1936. 5	福建仏教の新旧両派	海外仏教事情
1936. 5	広東仏教の特殊的展開	国際仏教通報
1936. 6.12-14	日華仏教関係に政治的背景なし	中外日報
1936. 8	華南の仏教を視る 広東仏教の特殊的開展	南瀛仏教
1936.10. 2- 4	汜太仏青大会と満州・支那	中外日報
1936.10	謎の支那を解く	南瀛仏教
1936.11	支那仏教徒の対日態度に就いて	海外仏教事情
1936	支那仏教の現状	仏教年鑑
1936	『東本願寺上海別院60年史』（明治8-38年部分執筆）	東本願寺

## 2) 日中仏教の案内役として

1934年5月から6月にかけて、藤井草宣は鈴木大拙の中国仏教史跡見学旅行団に同行した。藤井は鈴木を案内し、旧知の王一亭を始め、太虚や円瑛(1878-1953)といった中国仏教界を代表する僧侶たちを紹介し、内山書店の内山夫妻や魯迅との会談も準備した。帰国後に出版された鈴木『支那仏教視察記』について、藤井は実際の中国仏教を偏見なく観察し、理解しようとする鈴木の態度を称賛した<sup>54)</sup>。

著名人の活動を支援すると同時に、藤井草宣は既存の仏教団体の中でも日中提携を担当した。それが第2回汎太平洋仏教青年大会(日本開催)の中華班班長としての仕事である。1934年春、汎太平洋仏教青年大会のプログラムが発表されると、「満洲代表」の出席を知った中国側では日本に対する批判が高まった。このため藤井は、10年前の東亜仏教大会で水野梅暁がしたように、直接中国に行って交渉することを希望した。事務局がこれを拒否すると、藤井は事務局に対して「アジアの盟主や有色人種の指導者を気取っただけ」で中身が伴わないと批判し、もし事務局の言うように日本が本当に「先進国」ならば、中国に対していくらかでも平和的な手段を採れるはずだと訴えた<sup>55)</sup>。

藤井草宣は難局を乗り切るため、多数の手紙を中国人仏教徒に送って協力を仰いだ。また、鈴木大拙の視察旅行の旅程の半分ほどを別行動し、中国の僧侶を訪問して汎太平洋仏教青年大会への参加交渉を行った<sup>56)</sup>。その結果、中国人僧侶11名の出席約束を取り付けることができ、藤井はその経緯を『中外日報』に投稿して日本の事務局を批判した<sup>57)</sup>。

---

54) 藤井草宣「鈴木大拙博士の『支那仏教印象記』」1934年11月6-7日。

55) 「汎太平洋仏教青年大会に支那代表の欠席 藤井草宣氏勸説に渡航か」『中外日報』1934年2月22日。藤井草宣「支那仏教徒招待に就いて」(上)『中外日報』1934年5月6日。

56) 藤井草宣「天童山再登記」『中外日報』1934年6月5、7日。同「天童より阿育王へ来り 円瑛法師に会す」(上)『中外日報』1934年6月9日。

57) 藤井草宣「支那仏教徒招待に就いて」(下)『中外日報』1934年5月8日。

しかし、藤井草宣の努力は中国で波紋を引き起こしてしまった。汎太平洋仏青大会に反対していた上海のメディアは、これを日本仏教界の「宗教的侵略」だとして批判し、『中外日報』の記事を翻訳掲載して、藤井や太虚を名指して攻撃したのである<sup>58)</sup>。

藤井草宣が個人の信頼関係にもとづいて実現しようとした仏教提携は、中国で「売国奴」批判を招いて失敗してしまった。6月中旬、中国仏教会は汎太平洋仏青大会へ代表を派遣しない決定を下した<sup>59)</sup>。翌月、第2回汎太平洋仏教青年会大会が日本で開催された。藤井の努力に報いるため、数人の中国人仏教徒が個人の資格で参加し、辛うじて大会の体裁を保つことができた<sup>60)</sup>。

### 3) 日華仏教学会の設立

大会終了後、藤井草宣は失敗を教訓に、組織的恒常的な日中提携を目指した。それが日華仏教学会の設立である。同年8月、藤井草宣の意見に賛同した日中の仏教徒が集まって申し合わせを行い、全日本仏教青年会連盟や外務省文化事業部にも了解を求めた。11月の発起人会議に集まった僧侶たちは、各地の有名寺院や仏教会、中華民国公使館などに賛助が得られるよう働きかけ、翌35年には藤井を始め常任理事たちが中国を訪問し、太虚や上海の居士たちに参加を呼びかけた<sup>61)</sup>。

1935年7月、日華仏教学会は東京で数十人を集めた発会式を行った。会長

---

58) 藤井草宣「南京より」『中外日報』1934年6月12日。「一部份仏教徒將東渡參加辱国大会真相全係太虚之徒与日人勾結而成」『申報』1934年5月26日等。

59) 「汎太平洋仏青大会に支那遂に不参加 中国仏教会総会で出席否決」『中外日報』1934年6月20日。

60) 全日本仏教青年会連盟『第二回汎太平洋仏教青年会大会紀要』11頁。「汎太平洋仏青大会彙報 汎太平洋仏青不参加の中国仏教会代表決議破られる 僧俗六名の代表出席」『中外日報』1934年7月14日。

61) 『日華仏教』第1巻第1号、47-49頁。中国では日華仏教学会の中国名を「中日仏教学会」としたが、本論では日華仏教学会で統一する。

には大日本仏教青年連盟理事長の柴田一能を仰いだが、実質的な常務理事は藤井草宣を始め、大正大学留学中の墨禪（太虚の弟子）や厦門仏学院の神田恵雲、仏教救世軍の好村春基が中心となった<sup>62)</sup>。日華仏教学会の活動は、日本と中国が①研究者の交流を行い、②仏教研究の成果を交換し、③留学生を派遣しあうことと定められた。これは、1925年の東亜仏教大会で日中の仏教代表が決議し、未だに実現していない目標だった<sup>63)</sup>。

1936年1月、日華仏教学会は会誌『日華仏教』を創刊した。創刊準備号ともいうべき第1号は、日華仏教学会の趣旨ほか、会長や常任理事たちの「中国仏教旅行記」の他、藤井草宣のまとめた近代日華仏教交流史、墨禪「中日仏教学会設立に関する私見」、大醒「日中仏教比較」、そして日華仏教学会（中国では中日仏教学会）についての太虚との打合せの様子や中国側の賛助者一覧、さらには日華仏教学会設立までの日誌、「学会会則」、「学会役員名簿」が掲載された。

以後、『日華仏教』は中国人僧侶や学者の文章を日本語訳して掲載し、中国の著名な僧侶や居士を日本語で紹介した。また、日本仏教学者の論文や紹介も中国語訳して掲載された。「日華仏教彙報」コーナーでは、日中双方の仏教をとりまく社会状況の紹介も試みており、例えば日本の宗教制度を中国語訳したり、中国の寺廟監督条例を日本語で紹介している。1935年7月には、藤井草宣を上海に派遣し、日華仏教学会の事務所を置く計画も報告されている<sup>64)</sup>。

日本の仏教メディアで日華仏教学会の着実な活動が報道される一方、中国メディアは太虚と日本の関係を批判的に書きたてるようになった。1935年4月、支那内学院（南京）の仏教徒2名が日華仏教学会に協力した太虚を「売国奴」と批判した<sup>65)</sup>。支那内学院と太虚の弟子たちは、以前から仏教教義をめぐって

---

62) 『日華仏教』第1巻第1号、49-52頁。

63) 藤井草宣「四段階を経たる日華仏教交渉史断片」『日華仏教』第1巻第1号。

64) 『日華仏教』第1巻第4号、140-141頁。

65) 前掲『太虚法師年譜』208-209頁。

論戦を繰り広げた経緯があり、支那内学院の指導者である欧陽竟無は日本仏教をモデルとした改革を批判してきた。日中関係の悪化によって、中国仏教の改革をめぐる議論がナショナリズムと結びついた結果、太虚と日本の関係が批判にさらされるようになってしまったのである。

これに対し、墨禅など日本に留学中の太虚の弟子は反論記事を発表した。太虚も「日本仏教大衆に告げる」を発表し、日本のメディアの先走った報道を諫め、自分は一貫して日本の「満洲」建国を認めていないので、東北地方を中国に返還し、中国民衆の感情を好転させるよう日本仏教徒に訴えた<sup>66)</sup>。しかし、この太虚の訴えが日本のメディアに届けられた形跡はない。

藤井草宣は、当時の中国における反日世論の高まりは当然だとしつつ、日中の仏教提携を訴え続けた。汎太平洋仏教青年大会での失敗を軽視していたとは思えないが、日中関係が良くない時期だからこそ、日中両国僧侶による個人の間関係を維持しなければならないと考えていたようである。しかし、結論から言えば藤井の活動は日本と中国双方のナショナリズムの高まりの中で行き場を失ってしまうのである。

#### 4) 日中関係の悪化

1935年6月、京都の日華仏教研究会<sup>67)</sup>が訪華団を組織し、唯識研究のための視察を行った。しかし、中国側からは友好的な対応を受けられなかったようで、「中国の青年仏教徒の一部が仏教徒が日本に学べと言うのは、学術的なレベルが高いからではなく妻を持ちたいからだ」など日本仏教の「破戒」を揶揄された憤りを、大西良慶（清水寺）は帰国後『中外日報』にぶちまけ

---

66) 前掲『太虚法師年譜』208-209頁。太虚「告日本仏教大衆」『仏教研究』第11期、1935年4月24日。

67) 藤井草宣の日華仏教会と同時期に発足。藤井らは共同の活動を持ちかけたが、話し合いの結果、協力のみになった（『日華仏教』第1巻第1号）。会長は法隆寺貫主の佐伯定胤、副会長には高楠順次郎が、幹事長には浄土宗の林彦明が就任した（前掲『皇道仏教と大陸布教』210-211頁）。

た<sup>68)</sup>。

藤井草宣はさまざまこの記事に反論し、事前の準備に落ち度があったことや近年の中国状況の厳しさを日本側も理解して配慮すべきだと言い、日本と中国の仏教徒は「ただ友なれば足りはせぬか」と訴えた<sup>69)</sup>。1935年の日本仏教界には、藤井のこのような熱意を支持し、困難な状況にあっても中国と交友を深めるべきだとする意見が『中外日報』に投書されている<sup>70)</sup>。

藤井草宣は反論の後、再び中国における仏教界の困難な状況を『中外日報』に寄稿し、中国仏教が寺院破壊や財産没収の危機の中にあることを訴えた。そして、中国政府に対抗するために改革派の太虚の弟子たちの中でも、特に日本視察を終えたばかりの大醒が立ち上がるのではないかと紹介した<sup>71)</sup>。

同年5月から6月にかけて、藤井草宣は大醒の長年の夢だった日本視察を実現させた。大醒は太虚の僧侶制度改革の主張を支持し、日本のような近代的な僧侶育成制度の実現を切望していた僧侶である。上海留学時代からの友人のため、藤井は外務省の助成金を獲得し、奈良や京都を始めとする有名寺院や仏教専門学校、仏教系の大学、さらには東京帝国大学の研究機関などを案内し、高楠順次郎や常盤大定、鈴木大拙などの仏教学者との懇談をアレンジし、一ヶ月半の旅程の全てに同道した。帰国後、大醒は上海の仏学書局から『日本仏教視察記』を出版した。『中外日報』は1936年5月から9月まで大醒の視察記を翻訳して連載したほか、『大阪朝日新聞』の天声人語でも紹介されて話題となった<sup>72)</sup>。

しかし、1936年後半になると、日中関係はもはや個人の努力ではどうにもならない状況に陥っていった。1936年9月、中国視察から帰った全日本仏青

---

68) 「支那仏教は日本仏教に何も求めて居らぬ」『中外日報』1935年7月。

69) 藤井草宣「昭和十年訪華団批判」『中外日報』1935年8月1-2日。

70) 井上隆森「訪華団批判を読みて」1935年8月9-11日。

71) 藤井草宣「支那仏教会の危機来る(下)大醒法師決起す」『中外日報』1935年10月6日。

72) 藤井草宣「大醒法師之「日本仏教視察記」」『日華仏教』1936年5月、66-69頁。

連盟主事の浅野研真は、『中外日報』の紙面を大きく使って中国人僧侶たちの抗日活動を大々的に批判した。それは、中国の仏教改革をめぐって対立していた円瑛と太虚が提携し、「抗日の大旗のもと」積極的に活動し、多くの僧侶がこれに続いているとの記事だった。これにより太虚との協力関係を強調していた日華仏教学会は、緊急の対応を迫られた<sup>73)</sup>。

同年12月、『海潮音』に「我々の日本仏教徒に対する態度」という記事が掲載された<sup>74)</sup>。執筆者は太虚の高弟法舫である。法舫は、日本仏教徒や自称「支那通」の藤井草宣が中国人僧侶の抗日を太虚派が指導していると言うが、自分たち太虚の法脈は一部の中国人僧侶に「親日」だ批判されているのだと板挟みの状況を訴えた。実際の藤井は中国人僧侶の抗日を批判していないので、おそらく『中外日報』などの記事が翻訳される過程で、日本語の婉曲表現が誤訳されたのであろう。

法舫は、自分たち釈迦の弟子は「怨親平等」を旨とするので、自分たちが「抗日か否か?」という質問そのものが不適當であり、賢明な日本人ならば「満洲事変」以後の日本の対中政策の妥当性を認めないだろうとして、統一を進めつつある本当の中国を理解し、日本政府のでたらめを信じないように訴えた。さらに、現在の中国国民は日本を敵視しているのではなく、独立自主の努力している。日中の友好の鍵は全て日本側が握っており、華北から撤兵させ、「満洲国」を取り消せば中国人で日本を愛さないものはいなくなると主張した。そして最後に法舫は、中国人は決して理由なく日本人を殺害しないし、中国軍は日本を占領したりしない。しかし、中国仏教徒は日本軍が中国国内で人民を殺害するのを見ているのだと述べて、日本人仏教徒が慈悲心を呼び覚ますよう訴えた。

法舫が『海潮音』に寄せた記事は、藤井草宣や日本仏教界に対する最後通

---

73) 「太虚、円瑛両氏等提携し熾烈極まる抗日運動暴露」『中外日報』1936年9月29日。「中国僧の排日参加で善後策を講ず 矣す緊急理事会開く 日華仏教学会」1936年10月3日。

74) 法舫「我們对于日本仏教的態度」『海潮音』第17卷第12号、1936年12月。

牒になった。12月12日、「某消息通」とされる日本人僧侶の訪中記事が『中外日報』に掲載された。この某消息通とは、藤井草宣のことで間違いないだろう。記事によれば、中国人僧侶は誰一人彼と面会しなかったという。某消息通は、現在の中国では僧侶も抗日の姿勢を示さなければ世論に受け入れられないが、日本と中国の軍事衝突が収まり、外交交渉に移れば、彼らの態度も元に戻るだろうと希望的観測を述べる以外になかった<sup>75)</sup>。

同日の『中外日報』には、日華仏教会の本部が東京から藤井草宣の浄円寺に移転するのではないかとの記事が掲載されている。原因とされているのは、日中関係や財政の悪化による運営困難である<sup>76)</sup>。1937年1月を最後に、機関紙『日華仏教』は停刊し、以後、日華仏教会の活動は伝えられていない。

それでも藤井草宣は、日中仏教提携を諦めなかった。1937年7月、藤井草宣は北京へ留学し、華北で新たな人脈を築くことを目指した<sup>77)</sup>。しかし、まもなく盧溝橋事件が勃発し、日本と中国は全面的な戦争に突入してしまった。

## 7、日中戦争の戦火の中で

1937年7月14日、『中外日報』は藤井草宣ほか真宗大谷派の僧侶がいち早く皇軍慰問使として戦線で活動する様子を伝えた<sup>78)</sup>。その後、藤井は真宗大谷派の北京別院の責任者である「輪番」に就任した。日中戦争という非常時に、藤井は従来無縁だった教団の役職に付き、教団の期待を背負うようになった

---

75) 「中国僧の抗日参加は大勢に順応か 最近帰朝の某氏語る」『中外日報』1936年12月12日。

76) 「日華仏教会 藤井草宣氏より 豊橋へ移転か きょう理事会で協議」『中外日報』1936年12月12日。

77) 「藤井草宣氏 近く渡支」『中外日報』1937年6月3日。

78) 「北支事変で緊張の教界 大派、各宗派に率先し北支皇軍慰問使 藤岡了淳、藤井草宣両氏 きょう、急遽北支へ」『中外日報』1937年7月14日。藤井草宣「豊台の第一線を突破して 禍乱の北平一番乗り記」『中外日報』1937年7月29-31日。

のである<sup>79)</sup>。

しかし、藤井草宣の活動は基本的に変わらず、日本仏教界全体が北京で活動できるよう他宗派の世話もした<sup>80)</sup>。そして、日本の仏教教団より中国の仏教徒支援を優先した。例えば、真宗大谷派が設立した北京覚生女学校に中国人から多額の寄付があった際、日本の本山に送るよう指示する上司の北支開教監督を柔道の技で投げ飛ばし、「中国人の金は中国で使う」と宣言して輪番を辞め、帰国したという<sup>81)</sup>。

日中戦争の勃発によって、太虚など国民政府の徹底抗戦を支持する僧侶たちは重慶などの奥地へと移った。また、円瑛は上海で僧侶救護隊を組織したり、南洋へ赴いて各地の華僑に抗日を訴える遊説を行った<sup>82)</sup>。イギリス領香港や上海の外国租界に逃れた僧侶たちもいた。しかし、大醒など日本軍占領地に残らざるを得なかった僧侶たちも少なくない。藤井草宣は1938年末、再び中国へ渡り、日本軍占領地に知人の中国人僧侶たちの行方を確認して歩いた<sup>83)</sup>。その後も中国と日本を往復し、日本滞在中は仏教界各地で「中国勇躍」を鼓舞するような講演に忙しく活動した。かつて孤軍奮闘に近いかたちで活動していた藤井は、日中戦争の勃発によって、先見の明ある「支那通」として真宗大谷派に不可欠の人材になったのである<sup>84)</sup>。

明治以来、言葉の壁や教団の予算の限界、そして布教権の問題によって断念していた日本仏教界の中国における布教活動は、日中戦争の勃発によって

---

79) 「東亜和平建設に献身 留学僧大量養成の機関 東本願寺が北京に建設 指導に当る藤井草宣氏」『中外日報』1938年8月13日。

80) 例えば「いよいよ看板上がる妙心寺北京別院藤井草宣氏が保証人」『中外日報』1938年11月12日など。

81) 田原由紀雄「戦火のもとで — ある陸軍刑法違反事件」真宗大谷派三河別院『三河の真宗』1968年、131頁。

82) 明暘主編『円瑛法師年譜』宗教文化出版社、134-146頁。

83) 藤井草宣「南京特信 事変下の蘇州・南京に支那僧の消息を探る」『中外日報』1938年12月28日。

84) 伊藤康善「草宣を追う」『文化時報』1939年5月14日。

日本軍の宣撫工作の一貫に組み込まれることになった。各教団は国家への貢献を示すために競って臨時予算を組み、日本人の侵出にあわせて中国へ布教師を派遣した。この結果、中国の日本軍にとって各占領地でいかに日本の仏教教団を管理し、協力体制を築くかが問題となった。

華中の日本軍占領地では、上海を中心に日本軍の特務機関の指導の下、1939年2月に中支宗教大同連盟が組織された。翌3月以降、中支宗教大同連盟は興亜院華中連絡部の指揮下に移り、日本の神道・仏教・キリスト教の三教団体の中国進出を統括し、中国側との提携を目指す方針がとられた<sup>85)</sup>。

1939年1月、杭州の占領地では特務機関の指導下にいち早く日華仏教研究会杭州支部が設立され、その後、中支宗教大同連盟に合流した。同年半ば、藤井草宣は真宗大谷派の中支南京東本願寺主任兼中南支開教都督部出仕として南京に赴き、日華仏教研究会杭州支部が創刊した機関紙『晨鐘』に「中国仏教徒に与う」の文章を寄せた。この記事の中で藤井は、日中両国の僧侶が愛国的活動を行うのは当然であるから盧溝橋事件勃発直後の活動の是非は問わないといい、中国仏教徒に対して汪精衛の和平宣言に呼応し、和平工作に協力するよう呼びかけた。そして、中国仏教徒のために中国仏教会を再興し、社会救済事業と人材養成を行うよう訴えて「中華仏教徒万歳！」と書き、杭州に中国仏教会がないにもかかわらず、日華仏教会のような組織があるのは本末転倒だと苦言を呈した<sup>86)</sup>。

同時期、藤井草宣は中国から『中外日報』に寄稿し、中支宗教大同連盟の活動方針に実態が伴っていないことや、もし中国側の宗教団体を組織したいなら、道教やイスラム教、ラマ教なども宗教の範囲に含める必要があると指摘した。また、日本の宗教者は教団の利益優先でしか動かず、中国の宗教者とは行動原理が異なるので、本気で双方に活動させようと思ったら、無理に「日華」合同の組織をつくるのではなく、それぞれ別々に組織しなければなら

---

85) 拙稿「真宗本願寺派上海別院の『仏教復興』試論 — 中支宗教大同連盟との関係を中心に」『近代仏教』24号、2017年掲載予定。

86) 藤井草宣「中国仏教徒に与う」『晨鐘』創刊号、1939年12月。

ないとも提言している<sup>87)</sup>。

藤井草宣が日中の武力衝突を本心でどう見ていたかということは、戦時中に発表された文章からはわからない。ただ、他の日本人僧侶のように「皇国日本」や「対東亜共栄圏」といった空虚なスローガンを書くことはなかった。早期の停戦を願い、日本軍占領下の中国人仏教徒を支援し、中国で自宗派の利益だけを最優先させる日本の仏教教団を批判してやまなかったことは事実である。

1940年、藤井草宣は日華仏教連盟の南京総会理事として、汪精衛政権の官僚であり、また居士として著名な褚民誼に対し、日本軍占領地に残った中国人僧侶を紹介してへの支援を働きかけた<sup>88)</sup>。その結果、同年12月1日から28日間、南京で鎮江金山寺の仁山（1887-1951）による「法華経講義」を実現することができた。この中国式の「講経」は、期間中ずっと読経勤行するもので、仁山は毎日午後3時から5時過ぎまで獅子吼し、聴衆は日に日に増えて盛大な法会として実現したという<sup>89)</sup>。

その後、藤井草宣は上海に異動し、真宗大谷派上海別院の輪番と中支宗教大同連盟理事を兼任しつつ中国側との提携を目指した。1942年2月、上海租界で立ち上げられた中国仏教会には藤井の活躍が大きかったと日本のメディアが報じている<sup>90)</sup>。藤井は上海留学以来の旧知の仏教徒たちと日常的に交流できる実績をかわれ、半ば一方的に中支宗教大同連盟の宣撫工作専員嘱託に任命され、道教やイスラム教の他、数多くの民間宗教団体などへの宣撫工作も

---

87) 藤井草宣「大陸宗教工作」(宗教的「日華」「合作」の貧困)『中外日報』1940年1月27-28日。

88) 藤井草宣「新中央政府外交部長 褚民誼氏の護法」『中外日報』1940年11月3日。

89) 藤井草宣「仁山法師の南京講経」『中外日報』1940年12月13-15日。

90) 「上海興亜院も援助して華国仏教会を結成 大派藤井氏の努力実を結ぶ」『文化時報』1942年1月18日。「英仏租界の中国僧参加 上海租界仏教結成に成功 きのう英租界玉仏寺で会合」『中外日報』1942年1月18日。

任されたようである<sup>91)</sup>。ただし、その活動がどのようなものであったのかはわからない。

1943年夏、藤井草宣は上海での任務を終えて帰国した。そして11月21日夜、地元豊橋で開かれた帰朝歓迎会での発言を理由に、特高警察4人が浄円寺に踏込んで藤井を拘留した。1944年、豊橋の裁判所は機密漏洩や皇室に対する不敬などの罪で禁固6ヶ月、執行猶予3年の判決を藤井に言い渡した<sup>92)</sup>。

## 8、おわりに

最後に、藤井草宣の活動をもう一度確認しておこう。1927年の中国視察以来、藤井は親鸞の弟子として中国の人々の救いとなることを願い、中国人仏教徒たちと提携を目指した。藤井の活動の特徴は、多くの日本人仏教徒と異なり、日本仏教の源流としての中国を理想化せず、現実の中国に生きる人々をそのまま視野に捉え、仏教による救済が可能だと信じたことである。

そのために、藤井草宣は中国語を習得し、同時代の中国仏教について膨大な資料を収集した。藤井のように同時代の中国仏教に関心を寄せた日本仏教徒は少なく、藤井ほど広範囲にわたる資料を集めた研究者やジャーナリストは日本にいなかった。膨大な資料にもとづいて、藤井は多くの現代中国を紹介する記事を書き、伝統的な修行や戒律を守る中国人仏教徒の日常をいきいきと描写した。それは、学問的には高水準でも宗教家としての活動に欠ける日本の僧侶に対する批判でもあった。

同時に、藤井草宣は上海留学中は積極的に中国人仏教徒に日本の仏教研究の成果を紹介し、日本帰国後も資料を送るなどして、中国における仏教研究

---

91) 「日華仏教の朗景 支那居士が読経 大谷派上海別院で」『中外日報』1942年3月3日。藤井静宣「米英權益処理と宗教及び思想工作について」『中外日報』1942年7月23日。

92) 「真宗僧侶の軍刑違反事件検挙」『昭和特高弾圧史 4 宗教人に対する弾圧下一九四二～四五年』大平出版社、1975年。

の向上に貢献しようとした。他にも、上海滞在中は日本留学経験者に学術書の翻訳を依頼したり、日本帰国後も日本に留学した中国人仏教徒の面倒を見た。

「満洲事変」によって日中関係が悪化した後も、藤井草宣は日中仏教徒の提携を呼びかけ、多くの記事を寄稿した。鈴木大拙を中国に案内し、また大醒の日本視察に同道し、彼らの旅行記を宣伝した。汎太平洋仏教青年大会の第2回日本大会実現に尽力し、日華仏教学会を創設して日中仏教徒の恒常的な学術交流をも目指した。藤井は、日中間の政治的な関係が悪化する状況だからこそ、政治の枠を越えて日中の仏教徒が提携すること期待した。しかし、当時の中国も日本もナショナリズムを越えた仏教提携は実現できる状況になかったのである。

日中戦争の勃発によって、藤井草宣は従来得られることのなかった役職や資金など、所属教団の後ろ盾を得られるようになった。日本軍占領地において、藤井が目指す中国仏教の支援は日本軍の宣撫工作の一貫に取り込まれ、不幸な形で日本のナショナリズムとの齟齬を解消することができた。しかし、藤井は従来通り、中国における日本仏教教団の利益追求を批判し、中国人仏教徒による法要や難民救済などの活動を支援した。藤井のこのような活動は、他の日本人仏教徒の誰にもできなかったものであり、たとえ日本による占領地政策の枠の中であつたとしても、やはり特筆されるべきだと思われるのである。

[附記] 本稿は、公益財団法人三島海雲記念財団の第53回学術研究奨励金（平成27年）による成果の一部である。